

社会的思考を促す指導と評価

～根拠を明確にした考察について～

上谷 知未
社会科 坂井 宏行
寺田 康彦

1. テーマ設定の理由

社会科では「多面的、多角的に考察する力を育む言語活動の工夫」をテーマに平成23年度の研究を行った。ここでは多面的、多角的に社会事象を捉えるためにその定義を明確にし、ツールミンモデルなどのツールを用いて可視化し考察する力の育成を図った。こうした実践の中から、2つの課題が挙がってきた。一つは多面的・多角的な考察について、生徒はなんとなく意図をつかんでいるものの、実際の考察結果を見ると一面的な考察に終わる場面が見られたこと。もう一つは、生徒がツールミンモデルで示したD（date:事実）に自分の解釈が含まれ、主張の妥当性が大きく損なわれていたことである。

前者の課題については、社会的事象の多面的・多角的な見方が十分に浸透していなかったと考えられる。これについては基本的な概念を正しく生徒に理解させるとともに、授業における適切な考察場面を増やすことで概念の浸透を図っていかなければならない。また、教師の側もその意味や意義についてさらなる研究が必要であると感じた。一方、後者の課題であるが、主張の根拠となるべきDの意義が生徒に十分に理解されていなかったようである。主張にはその理由が必要であり、理由は根拠に基づいて示されるべきものである。今後は根拠の重要性を再認識させ、論理的な考察を促していく必要がある。これについては生徒の示すDが事実、もしくはそれに近い情報となっているかどうかをしっかりと吟味していかなければならない。

社会科の目標として「諸資料に基づいて多面的・多角的に考察し」と学習指導要領にあるように、社会科には資料を読み取る、読み取った事実を基に論理的に考察する、という統合的な力が求められる。このことから、前年度から取り組んできた多面的・多角的な考察は、諸資料から得られた適切な情報に基づいて成り立っていなければならない。そこで前年度の研究をさらに深めていくためには、資料などから自分の主張に必要な情報を根拠として取り出し、それを活用する力を生徒に身に付けさせることが要求される。

こうした前年度の課題や教科の特性から、多面的・多角的な考察については昨年度の研究を継続する一方で、今年度は「根拠」を明確にした論理的な考察について研究を進めることにした。多面的・多角的な考察の背景には、必ず根拠に基づいた解釈が必要であり、論理的な考察が求められる。多面的・多角的に社会的事象を捉え、資料から得た情報や既習事項などによる根拠に基づいた論理的な考察を「社会的思考」として捉え、こうした思考が生徒に身に付くようにテーマを設定した。

また、根拠に基づいた考察について指導する一方で、生徒が自分の主張に対する根拠を諸資料などから取り出し、その妥当性を検討し、明確にその根拠に沿って考察を深めることを評価することにした。思考の流れといった学習過程の可視化や学習内容の共有化を図り、形成的評価に基づくフィードバックを行うことで生徒の思考力の向上や授業改善に取り組んだ。

2. 思考力を育むための指導と評価

(1) 教科として特に育みたい思考力について

学習指導要領にあるように、「国家・社会の形成者として必要な公民的資質の基礎を養う」ことが

社会科の究極的な目標といえる。本校社会科ではそれを受けて、最終的に自分で意見を持つことができる社会人となるために必要な討論の力を身に付けさせたいと考えている。そこでは論理的な意見を持ち説明するだけでなく、他者の意見を聞いて検討し、意見を変えたり発展させたりする力が求められる。またその際、考察が一面的なものにとどまらないように、多面的・多角的な見方を身に付けなければならない。

こうした思考力の習得は中学校3年間の指導全体において段階的に行われるべきである。以下のように、生徒の発達段階に応じた目標を設定し、思考力を身に付けさせていく必要がある。

- 1年 社会的事象について多面的、もしくは多角的に捉え、論理的な意見を持つとともに、他者の意見を踏まえて自分の意見に生かそうとすることができる。
- 2年 社会的事象を多面的・多角的に捉え論理的な意見を持つとともに、他者の意見を踏まえて自分の意見を変容・強化させることができる。
- 3年 社会的事象を多面的・多角的に捉え論理的な意見を持つとともに、他者の意見から自分の意見を変容・強化させ、その理由についても説明することができる。

今年度の研究ではこうした目標に近づくため、特に根拠を明確にして多面的・多角的に考察する力の育成を図ることに焦点を置いている。

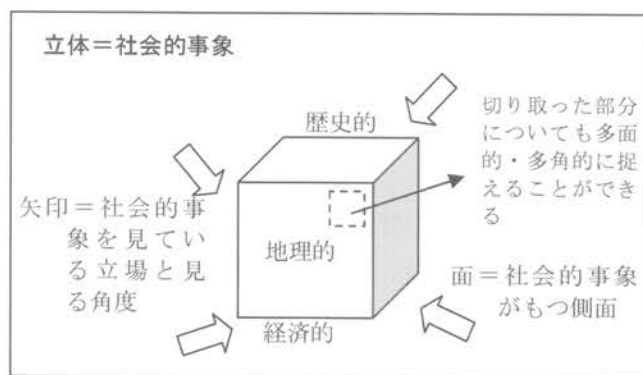
(2) 思考力の指導

①教科の方針

今年度の研究における「社会的思考」とは「多面的・多角的な考察」「根拠を明確にした考察」の2つの柱から構成される。本校社会科としてその定義を明らかにし、その上でそれぞれの項目を生徒の考察に生かせるように授業計画や指導・評価の実践を図った。

ア 多面的・多角的な考察

学習指導要領解説には『多面的』とは学習対象としている社会的事象が様々な面をもっていることを、また『多角的』とはそうした社会的事象を様々な角度から考察し理解することを意味している」と書かれている。そこで、本校では「多面的」を社会的事象が地理的、歴史的、政治的、社会的といった様々な側面を持つ



持っていること、「多角的」とは社会事象を見る主体（立場）には様々なものがあり、見る角度が異なることと定義した。右がそのイメージ図である。こうした「多面的」「多角的」な社会的事象の捉え方を組み合わせて考察させることに取り組みたい。

イ 根拠を明確にした考察

資料から読み取った情報や既習事項などの情報が考察における根拠となりうると考えた。それをまとめると以下のようなになる。

- ・ 公的機関や研究者が公表している資料（統計、地図など）から読み取った情報。ただし、資料の出所に留意し、より信頼性の高いものを扱うように努める。
- ・ 教科書、資料集、地図帳などの信頼性の高い教材から読み取った情報、もしくはこれらを

用いて学習した既習事項。

一般的に考察における根拠というと、資料などから得られた情報とそれに対する解釈を含んだものとして捉える場合があるが、あえて本校社会科では前者と後者を分けることで思考力の向上につながると考えた。これには2つの理由が挙げられる。

一つは、論理的な思考のためには、より確かな情報を拠り所とする必要があるからである。何が根拠となるかを明確にすることで、根拠に基づいて自分の意見を論理的に構築することが可能となり、結論の妥当性を高めることにつながると考えた。また、もう一つの理由は、根拠と解釈とを分けることで思考が可視化され、それぞれの視点から思考の流れを分析・検討しやすくなるからである。それは自分の考察を分析するだけでなく、他者との比較にも有意義である。特に賛成・反対といった価値判断を伴う課題については、結論は同じであっても異なる根拠から考察している場合や、根拠が同じでも理由付け（解釈）の違いから異なる結論となる場合があり、根拠という視点で他者の意見を分析することで、より思考を深めることにつながると考えられる。

②思考力をはぐくむための手立て

ア 多面的・多角的のイメージ図を活用した授業計画とその実践

授業計画の段階において、前項で示したイメージ図を用いることで、よりの確に授業の主題となる事象を捉えられ、多面的・多角的な考察の場面を設定しやすくなると考えられる。その際、以下の点について一つひとつ確認していく必要がある。

- ・授業、もしくは単元で取り扱いたい社会的事象は何か。(立方体)
- ・社会事象が持つ側面の中から、授業で取り上げるものは何か。(立方体の側面)
- ・考察するときの立場は何か。(矢印)
- ・考察に必要な資料は何か。
- ・考察に必要な生徒の活動は何か。

なお、すべての題材において多面的・多角的な考察を取り入れるのは困難であり現実的ではない。扱う題材がこうした考察に適しているかを考慮して、考察場面を設定する必要がある。場合によっては「多面的な考察」「多角的な考察」といった形で授業を計画することも1つの方法である。多面的・多角的な考察場面を適切に設定した授業を行うことで、生徒にとっての概念の理解や考察方法の習得につながると考えられる。

イ ツールミンモデルを用いた考察の型の活用

前年度の研究において、ツールミンモデルを一部の授業で用いたが、根拠に関するものとは別に2つの課題が挙げられる。一つはこの難解なモデルにこだわりすぎると、生徒の柔軟な思考が阻害されてしまう恐れがあることである。もう一つは論理的考察の練習にはなるが、すべての場面で用いることが難しいことである。

そこで、今年度は根拠を明らかにするための考察の型としてツールミンモデルを位置づけた。よってツールミンモデルの理念や概念を詳しく習得することを目的とするのではなく、根拠とその理由付け（解釈）を分けて記述し、結論を明確に表すことのみを目的に活用することにした。これにより、根拠を明らかにした思考過程の可視化が可能となり、根拠、理由付け（解釈）の2つの視点から意見の分析が可能となる。この可視化により、考察内容の構造が自分を含め、読み手（聞き手）に理解されやすくなると考えられる。

③言語活動との関連

社会科における言語活動の充実について、学習指導要領解説には「社会的な見方や考え方を養うことをより一層重視する観点に立って、社会的事象の意味、意義を解釈する学習や事象の特色や事象間の関連を説明するなど」と書かれている。前述の手立てを実践する言語活動として、ワークシートやレポートでの説明や論述、発表や討論が適していると考えられる。多面的・多角的に事象を捉えながら前述のトゥールミンモデルの型に当てはめて記述させることにより、根拠を明らかにした考察が行われる。また、その記述内容を基に発表や討論を行うことで考察内容が共有され、生徒にとって自分では気づかなかった事象の側面、事象を見る立場の発見につながり、より深い思考が可能となると考えられる。

(3) 思考力の評価

解釈や説明といった社会科で重視される言語活動には、生徒一人ひとりの判断が含まれるため、発表や討論での発言内容、ワークシートやレポートの記述内容が評価の対象として適していると考えられる。今年度の研究では特に形成的評価を重視している。学習の過程で生徒が自己の学習状況を評価し、学習目標に近づく手がかりを得る工夫として、以下の実践を行った。

①思考の可視化

評価の妥当性を高めるため考察過程の可視化を行い、よりの確に考察内容を理解できるように努めた。具体的な方法として、板書の工夫、小型のホワイトボードの活用、教材提示装置によるワークシートの提示などが挙げられる。また、その中でトゥールミンモデルの考察の型を用いることにより、さらなる可視化が促されると考えた。

②共有

①の可視化や発表、討論を通して学習成果を共有することで、生徒が自分の考察内容と他者の考察内容を比較・検討し、自己評価が促されることで自己指導力の向上が図られると考えた。また、意見交換の場面では生徒同士の相互評価も取り入れ、意見の変容や強化につながるような工夫を行った。

また、生徒が根拠を明確にした考察を行えるように、以下の点について指導、支援を行った。

- ・根拠は一つとは限らないこと。
多面的・多角的に社会的事象を捉える力を養う必要がある。
- ・結論に対する妥当性が確かであること。
結論の理由を説明するために過不足ない内容である必要がある。

さらに授業内で発表された生徒の考察内容に対して、教師から以下のような評価を行うことで、その場での生徒へのフィードバックを図った。

- ・それは〇〇の立場からの意見だね。
- ・それは、△△の面から捉えた意見だね。
- ・それは、Aの資料とBの資料を比べて（関連付けて）考えてみたことだね。
- ・それは、この資料や事実を根拠にして考えたことだね。

3. 各学年の実践

1年の実践

1. 実践内容

「多面的・多角的な考察」や「根拠を明確にした考察」を身に付けさせるために、多面的・多角的のイメージ図の活用や、トータルミンモデルを用いた考察の型の活用などの手立てを工夫した。これらの実践を基に、生徒に社会的な思考力を育ませたいと考えた。

また、生徒の思考を可視化したり、学習効果を共有したりするなどの工夫を取り入れ、発表や討論での発言内容やワークシートやレポートの記述内容などを通しての形成的評価の在り方も重視してきた。

以下にその一例を述べる。

(1) 多面的・多角的な考察場面を設けた授業実践

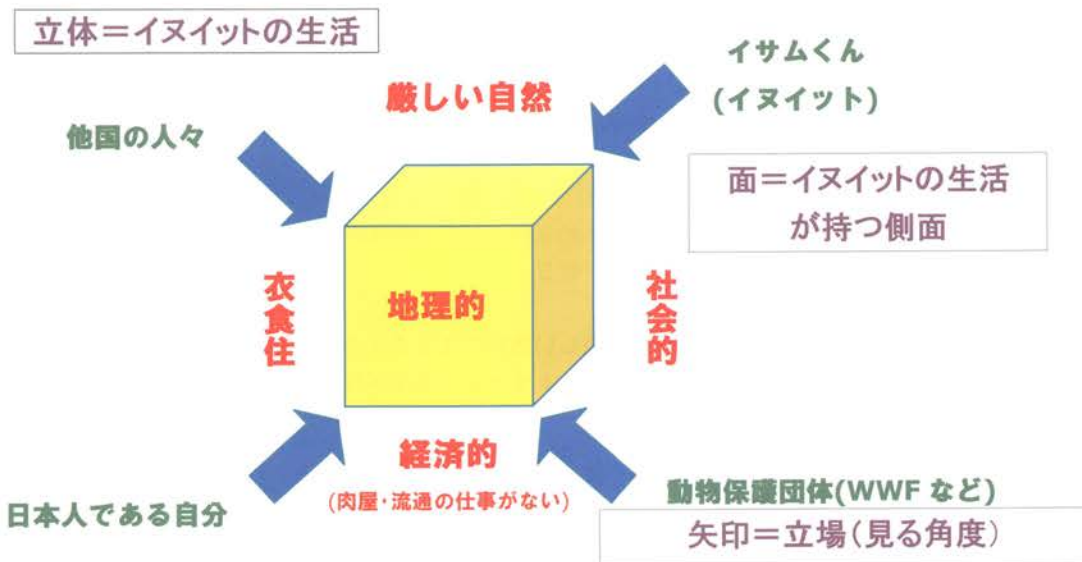
〈单元名〉「雪と氷の中でくらす人々」

～グリーンランドにおいて、年々イヌイットの人口が減っているのはどうしてだろう？～

本時の授業では、「複数の側面と立場から社会的事象を捉えさせる学習活動」と「伝え合う言語活動（共有場面）」を設定した教材の開発についての実践を行った。端的に言うと、それぞれが資料から読み取ったことを根拠として意欲的に発言し、多面的・多角的な考察を基に説明ができるという、今後の社会科の授業スタイルの基礎を培うための練習と考えたのである。

具体的には、グリーンランドにおいて年々イヌイットの人口が減っている理由を、日本人の生活と比較したり、与えられた資料と関連付けたりしながら多面的・多角的に考えさせ、発表させた。その評価については、イヌイットの生活を描いた映像資料を視聴しながら各自が答え合わせをするとともに、隣の生徒とワークシートの内容を見せ合うことで他者評価も行わせた。

なお、この授業で、『イヌイットの生活』という事象を多面的・多角的に捉えると、次のようなイメージとなる。



この授業の段階では、生徒はまだまだ社会的事象を多面的や多角的に考えるという意識は低かったが、授業ごとに「多面的・多角的を意識して」とくり返し指示していくと、次第に意識し始めたように思う。

◆授業の展開（学習指導案より抜粋）

学習活動・内容	教師の指導・支援および留意点 評価と方法 []	時間
1 グリーンランドにある小さな村の風景を観て、その気候とイヌイットの生活の特色を捉える。	<p>北極圏に住むイヌイットはどんな生活をしているのだろうか？</p> <ul style="list-style-type: none"> 生徒の興味をゆさぶるために、「北極と南極ではどちらが寒いか」、「イヌイットはどんな生活(衣食住)をしているか」、「その生活は、我々の生活と比較してどう違うか」などの質問を小出しに行う。 質問のやりとりの中から、我々からは想像もできないような伝統的な生活もあれば、意外と日本人とは変わらないくらしをしていることにも気付かせる。 	15
2 イヌイットの生活の変化について多面的・多角的に考え、発表する。	<ul style="list-style-type: none"> 単なる予想ではなく、与えられた資料などを根拠として、様々な側面から考えるように促す。 	25
<p>グリーンランドにおいて、年々イヌイットの人口が減っているのはどうしてだろう？</p>		
<p>(予想される意見)</p> <ul style="list-style-type: none"> 仕事を探しての他地域への移動 収入の大幅減少 地球温暖化による動物の激減 動物激減の対応策としての狩りの制限 E U諸国の毛皮輸入制限 など <p>配付資料の出典</p> <ul style="list-style-type: none"> 岸上伸啓『イヌイット』中公新書 WWF ジャパン 公式ウェブサイト J C C C A 公式ホームページ など 	<ul style="list-style-type: none"> 自分の考えと理由をワークシートに記入するよう指示する。 同じような意見でも、なるべく多くの生徒に自分の意見を発表させたい。 <p>○評価</p> <p>具体的な理由を書いて、資料から読み取ったことを根拠にして説明することができている。</p> <p>[ワークシートの内容と発表] (形成的評価) 【観点②③】</p> <ul style="list-style-type: none"> イヌイットの生活に関するDVDを視聴し、生活の変化の理由を検証する。 DVDを観ながら各自で答え合わせをし、自己評価をさせる。 隣の生徒とワークシートを見せ合い、他者評価をさせる。 <p>○評価</p> <p>検証結果をもとに、ワークシートに訂正や付け足しなどができている。</p> <p>[活動の様子の観察] 【観点②】</p> <ul style="list-style-type: none"> 生活の背景には自然的条件や社会的条件なども影響を与えていることを知り、彼らの生活を探る意識をもたせる。 	
3 現代に生きるイヌイットは、将来的にその生活スタイルをどのように変えていくのかを考える。	<p>イヌイットの1人であるイサムくんは、将来どうやってくらししていくのかな？</p> <ul style="list-style-type: none"> 今日学んだことをヒントにして、「生活」「自然」「仕事」…など様々な側面から根拠立てて考えるように助言する。 個別に自分の考えをまとめ、ワークシートに記述する。 極寒の地で生活していくための工夫や知恵に気付かせると同時に、自然的条件や社会的条件の変化が生活に与える影響についても考えさせる。 <p>○評価</p> <p>寒さが厳しい地域に生きる人々の立場で事象を捉え、彼らの異文化を尊重しようとする態度が見られる。</p> <p>[ワークシートの内容・発言内容] 【観点①②】</p>	10
4 本時のまとめをする。	<ul style="list-style-type: none"> 授業のまとめを基に、できるだけ多くの生徒に感想を発表させたい。 これから学習する他地域の学習への足がかりとすると同時に、我々日本人の生活についても思い描かせたい。 	

(2) ワークシートやレポートを通しての授業における評価実践

〈单元名〉「アフリカの課題と展望」

～アフリカ州が発展していくためには、どのような援助が必要だろうか？～

本時の授業では、社会科で重視される解釈や説明などの言語活動を評価しやすくするために、レポートの記述を行った。

内容としては、アフリカ州の人々の生活を基に、アフリカ州の発展を考えさせる授業の中で、テーマに沿ってレポートを作成させた。その際、資料に基づいて正確に調べ、調べた結果から自分なりに考えたことや意見を主張できるように支援した。

また、レポート作成時には、最初に言いたいことを明確に打ち出すこと、根拠となるデータや考え方を示すなどして理由をしっかりと書くこと、一文は40字以内にまとめることなどを指示した。

さらに、考察過程を可視化する手立てとして、トゥールミンモデルの「データ(D)」「理由づけ(W)」「結論(C)」の3つを、記述・発表に取り入れることを意識させた。

そして、意見発表の際には、生徒同士の相互評価を取り入れることによって共感し合ったり、意見の変容につながるような配慮をした。

2. 考察

年末に行った「多面的・多角的にものごとを考えること」についてのアンケート結果を見てみると、社会的事象をいろいろな立場で考える力についてはついてきてはいるが、まだまだ多面的に捉える力がついていないのが現状である。一方、何が根拠かの見分けはだいたいついてきているという結果となった。

1年間、これらの取り組みをしてきての教師側の反省点として、事象を絞る必要性和、事象を見る視点や立場を引き出す問題意識を常に持たせる必要性を感じた。

さらに、社会科において、思考・判断した結果をトゥールミンモデルに基づいて可視化することは、教師にとっても生徒にとっても根拠に基づいた考察となっているかを確認する上で適切であると考えられる。今後は、記述の場面でも発表の場面でも、徐々にD(事実)・W(理由づけ)・C(結論)を明確に示しているかどうかで、根拠に基づいて考察しているかを判断していきたい。

そのためには、早い段階で学習課題に対する自分の考えを根拠立てて記述したり、発表したりできる力を伸ばしていきたいと考えている。

そして、今後は長いスパンで発表や討論の場面を通し、共有した学習内容をもう一度個人に還元するなどして、一人ひとりの思考を深める工夫をしていきたいと考えている。

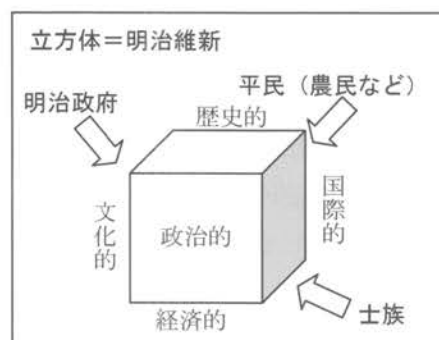
一方、ワークシートやレポートを通しての授業では、常に社会的事象をさまざまな枠組みから多面的に捉えることと、様々な立場に立って多角的に捉えることを意識させながら他者と意見交流をさせるようにしていきたい。そのことで、生徒たちは自分では気付かなかった立場からも社会的事象を見つめ直すことができるようになり、テーマ追究に深みが増すのではないかと思う。同時に、トゥールミンモデルを意識させていくことで、事象の特色や事象間の関連についての説明・事象を比較したり関連付けたりする言語活動において、生徒一人ひとりの価値判断など思考・判断した過程の評価もしやすくなるであろう。

2年の実践

1. 実践内容

(1) 実践の概要

近世から近代への過渡期である明治維新は日本の政治的、経済的、文化的などあらゆる側面においてその影響を見ることができる。日本の歴史上、とりわけ世の中の変化の幅が大きく、変化の内容を捉えやすい時期であるともいえる。そこで、この事象の学習の中で根拠に基づき多面的・多角的に考察する場面を設定することにした。ここでは最終的に明治維新の良し悪しを評価するレポートを論述させることで、急速に進められた政府による上からの近代化、それに対する人々の不満や負担の増大、などを考察させることを学習目標とした。また、授業では多角的（可能な場合は多面的も含む）に考察する場面を意図的に設定し、多面的・多角的に事象を捉える力の育成を図った。



(2) 実践の流れ

①開国と不平等条約（1時）

不平等条約の内容とその結果について説明した上で、「人々が開国に賛成したかどうか」について、「武士」「百姓」「商人」の立場から考察させた。不平等条約の内容とその結果を根拠に「武士」の安定した支配への不安、「百姓」の生産地の苦悩、「商人」の貿易や買占めによる利益、また共通の問題としての物価の上昇を捉えさせ、攘夷思想が広がっていったことを理解させた。

②江戸幕府の滅亡（2時）

安政の大獄から薩長同盟成立までを説明した上で、本来対立していた薩摩藩、長州藩による「薩長同盟成立の理由」について、それぞれの立場から考察させた。その際、それぞれが経験した欧米列強との戦いの結果や政策に一貫性を欠いた幕府政治の弱体化などの事象を根拠として捉えさせた。そして攘夷の実行が事実上不可能であり、幕藩体制の限界から統一国家の形成が急務であったことを理解させた。

③レポート1「江戸幕府滅亡。人々はどのような世の中を望んだだろうか？」（3時）

江戸幕府が滅亡した時点で、新政府による新しい政治に対して、どのような立場の人々が、どのような理由で、どのような世の中を望んだのかを考察させた。また、その際1つの立場で終わらず、2つの立場を設定して考察を進めるように指導した。

④新政府の成立（4時）

廃藩置県によって幕藩体制が崩壊したことを説明した上で、大きな混乱もなく進行した「支配体制の変革の理由」について、近世からの支配者である「大名」、新しい支配者である「明治政府」の立場から考察させた。廃藩置県の流れや薩長同盟の既習事項を根拠に、中央集権体制の確立を急ぐ明治政府、近世からの負債や戊辰戦争の負担を解消したい大名、というそれぞれの課題を捉えさせ、両者の思惑が一致して改革が進んだことを学習した。

⑤維新の三大改革（5時）

政府の三大改革に対して一揆が起こったことを説明した上で、「三大改革に対する人々の不満の理由」について、「平民」「士族」の立場から考察させた。改革の内容を根拠として「平民」の立場では授業料の負担や労働力の喪失、江戸時代と変わらない税負担などを捉えさせた。また、「士族」の立場では江戸時代の既習事項も根拠に加え、武士以外の身分との共闘への不満、武士としての諸権利の廃止などを捉えさせた。

⑥文明国をめざして（6時）

扱う情報量が多いため授業の中心となる考察場面を設定せず、明治維新における経済、文化、思想について説明した。また絵画資料から都市生活の変化を読み取らせ、政治的な変化にとどまらず、人々の生活が大きく変わっていったことを理解させた。

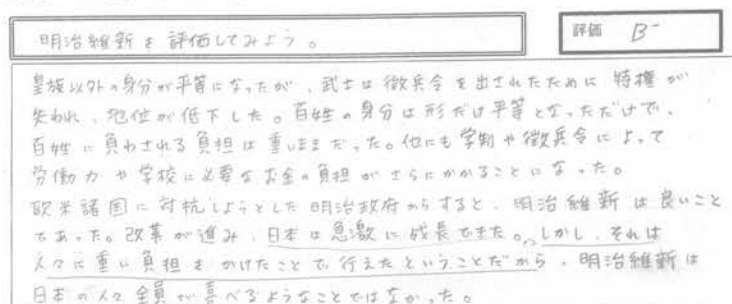
⑦レポート2「明治維新で人々の望みは実現しただろうか？」

レポート3「明治維新を評価してみよう」（7時）

レポート2ではレポート1の考察について、実際に人々の望みが実現したかどうかを結論とし、その理由を根拠に基づいて考察させた。

レポート3では常に授業で扱ってきた明治政府の立場、レポート1・2で扱った人々の立場などを考慮し、現在の自分の立場から日本にとっての明治維新の良し悪しをA、B+、B、B-、Cの5段階で生徒に評価させ、その理由をまとめさせた。そして、多面的・多角的に論述できているかどうかを教師が評価した。

資料：生徒の記述内容（レポート3）



(3) 形成的評価

授業・レポートではツールミンモデルの型を用いて思考過程の可視化を図り、生徒が自分の意見を記述している間、机間指導で「根拠」とした情報が適しているかを個別に指導した。また、その後に意見交換を行わせて意見共有の場とし、生徒自身による形成的評価を促した。ここでは、ワークシートを持ち寄って他者の意見の説明を聞く中で、結論だけではなく「根拠」・「理由付け」についても自分との共通点や相違点を見つけさせ、他者の意見を書き加えたり、自分の意見を変更したりする機会とした。また、根拠と結論が関連しているかなどを互いに確認させた。

2. 成果と課題

2学年では「根拠を明らかにした考察」「多面的・多角的な考察」「意見交流」についてアンケートを行った。その結果を基に、以下に成果と課題を挙げることにする。

根拠を明らかにすることでより説得力を持った意見を持つことができるようになったとする生徒がいる一方で、資料などから得た情報を根拠として扱うことに難しさを感じている生徒も多い。資料から情報をいかに取り出すかを繰り返し学習していく必要がある。

また、4月に比べて事象を多面的・多角的に捉えようとする生徒の姿勢が身に付いてきたように思える。しかし、両方の捉え方を同時に行うことに難しさを感じる生徒はまだ多く、特に多面的な捉え方への不安があるようである。政治的、経済的など、事象がいろいろな側面を持っていることを認識させていきたい。さらにこうした捉え方の前提として、事象に関する基礎的・基本的な知識の理解が不可欠である。こうした知識をいかに身に付けさせるかを今一度考えていかなければならない。

意見交流の場面では、意見の相違があった場合、相手の根拠や理由付けを確認する生徒が増えてきた。ここからさらに自分の意見を変容させたりする力の育成が来年度の課題となる。

3年の実践

1. 実践内容

(1) 実践の概要

公民的分野で取り扱う内容は、多面的・多角的に考察することを求められるものばかりであるが、その中で「現代社会の見方や考え方」と「現代の民主政治」の各単元で「根拠を明確にした考察」について実践を行った。これらの単元に注目したのは、政治そのものが「対立」を「合意」に至らせる営みだからである。政治的な課題には、それに関わる様々な立場が存在し、その課題には様々な側面が存在する。合意形成には、多面的・多角的に物事を捉え、明確な根拠に基づいた議論が必要となる。一方的あるいは一面的な物事の捉え方では望ましい合意形成には至らない。

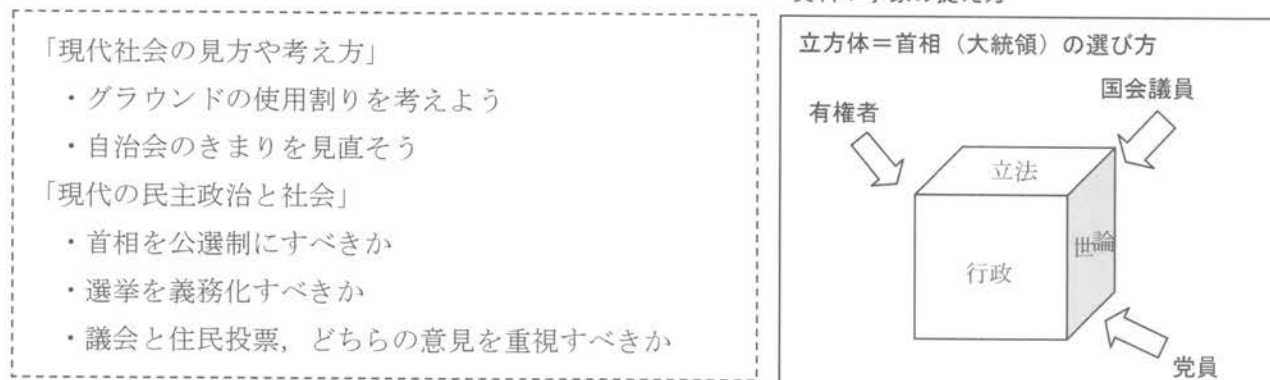
3年生は、この2年間、地理的分野及び歴史的分野の学習を通して、社会的事象を多面的・多角的に考察する力を身に付けてきた。2つの単元は、その力を試す機会となると考えた。そして3年目となる今年度は、社会的事象を多面的・多角的に捉えることで論理的な意見を持つとともに、他者の意見から自分の意見を変容・強化させ、その理由についても説明できるようになることを目指した。

(2) 実践の流れ

①思考力を育む学習活動

社会的事象を多面的・多角的に捉えるために、事象を関連付けて考えさせたり、事象を比較して考えさせたりすることに力を入れてきた。そのため、学習課題には、「動的なもの」「二者択一」「ランキング」などを取り入れるようにした。言語活動としては、学習課題に対する自分の考えを記述させた後、短時間の討論を小単元の終末に行わせた。これらは、以下の学習課題で取り組んだ。

資料：事象の捉え方



②実践例

わが国の立法と行政のしくみとはたらきについての学習を一通り終えた後で、「日本の内閣総理大臣を国会議員が選ぶべきか、国民が選ぶべきか」という学習課題に取り組ませた。配當時数は、「行政のしくみと内閣」で2時間（本時2/2）とした。授業の板書を見て分かる通り、日本の首相の選び方と米大統領の選び方という2つの事象を比較させることで、わが国の民主政治の特色や課題を明らかにすることをねらった。公民的分野で扱う社会的事象の多くは、既習の知識や概念を総動員して捉えていく必要がある。そのため、単元の指導計画では習得・活用の流れを大切にしている。

いわゆる首相公選制の是非について予想される肯定側の論点は、民意を反映した政策の決定、国民の政治意識の向上、政治的リーダーシップの発揮などが柱となる。一方、否定側の論点は、一貫性のない意思決定、代議制の崩壊、政策決定と実行に関わる効率の良さなどが柱となる。



・両側（賛成する理由，反対する理由） ・中央（学習課題に関わるキーワードや説明）

首相公選制の是非を考えるにあたって，教師が，思考や判断の根拠として想定した主な事実は，下記のとおりである。ほとんどが既習の知識や概念となる。授業では，これらが生徒の発表や記述に使われているかどうかを評価する。

- ・任期の違い 4年以上（交代有り）上限なし 4年（交代なし）2回まで
- ・選出方法の違い 国会議員による指名 国民による間接選挙
- ・権限の違い 議会の解散権の有無 法案の拒否権の有無
- ・政党政治の違い 多党制 二大政党制

これらの根拠となる事実をどのように解釈するかについては，立場が大きく関わっていることが分かる。立場を教師側から指定しなければ，生徒はいろいろな立場から考えることになる。生徒は，国民（有権者），国会議員，首相（行政の長）のいずれかの立場で学習課題について考えていたが，圧倒的に国民の立場が多かった。国民の立場に立つと，選出方法を根拠にして国民主権や民意の反映の側面から，首相公選制を支持するようになる。一方，国会議員や首相の立場に立つと，政党政治の形態と選出方法を根拠に国会や内閣の運営上の効率のよさを理由として，首相公選制に反対するようになる。国民の立場でも，衆議院の解散や不信任決議を根拠にした場合，国民の意思の変化に柔軟に対応できることを理由に首相公選制に反対するようになる。

生徒が発表したことや記述したものに，最も多く使われていた根拠は，選出方法の違いであり，民意を反映するしくみであるかどうかという解釈を行っていた。しかし，それ以外の根拠を用いた発表を聞いて，どちらの選び方がよいのか迷う生徒も出てきた。こうした生徒の変容を見ていると，討論という言語活動によって，今までにない立場や事象の側面に気づき，思考が深まっていることが分かる。

(3) 形成的評価

公民的分野では，主に「二者択一」や「ランキング」などのように判断を伴う作業や学習課題に取り組みせ，それらを通して個々の生徒が思考・判断した過程や結果を共有できる場を設け，生徒が自分の考えを再構築できるよう努めている。思考・判断した過程や結果の中に，「関連付け」や「比較」による「解釈」があるかどうかを発表や記述内容から評価した。

具体的には，生徒が自分の考えを文章にまとめている時や自分の考えを発表した時に，教師から，

どの立場から考えたのか、どんな側面から捉えたのか、どんな資料を比較したり、関連付けて考えたのか、どんなことを根拠にしたのかについて、助言したり、確認したりした。

2. 成果と課題

資料：生徒の記述内容

学習課題「内閣総理大臣の選び方は、現在の日本の方式がよいか、米大統領選挙の方式がよいか」

僕は国民という立場で日本の方式がいいと思う。まずアメリカでは国民が大統領を選べますが、4年間はと大統領が確定する。しかし日本は、やり方がおもしろくなってきたら支持率は下がり、内閣を変えることができるので、より国民の意見が政治に反映されやすい。国民が大統領の表面だけを見てしまった場合は実際には違ったとなると4年も大統領をしているのはよくないと思うからです。

一面的な捉え方の例

- | | |
|-----|-----------|
| ①主張 | 公選制に反対 |
| ②立場 | 国民 |
| ③根拠 | 大統領の任期 |
| ④解釈 | 民意が反映しにくい |
| ⑤比較 | 有り |

アメリカの方式が良いと思う。国民の立場からすれば、議員に代わって首相に選ばれるのはいいが、大統領選挙人という国会議員とは別の人が選ばれることでより強く国民の意見が反映された首相が選ばれると思う。また、法案の拒否や大統領の権限が強いため、なかなか政治が行えず、議会は議会で大統領に反対して解散させないで考え方をほころびていたりする。議会で立法、大統領が行政という風に分けることで、それぞれに国民の意見が反映されると思う。

多面的な捉え方の例

- | | |
|----------|---------------------------------|
| ①主張 | 公選制に賛成 |
| ②立場 | 国民 |
| ③根拠 | 国民による選挙
法案の拒否権
議会の解散権 |
| ④解釈 | 民意が反映される
立法と行政の独立性
が保持される |
| ⑤比較・関連付け | 有り |

以上の記述を見て分かる通り、教師が立場を指示しなくても、生徒は自分の立場を明確にしてから、自分の考えをまとめることができるようになってきている。「私は、～の立場で」「～の立場からすれば」というように表現している。社会的な事象を捉える立場を決めることで、事象のもつ複数の側面が見え、学習課題について考える根拠となる情報を取り出せる。12月に実施したアンケートで「多面的・多角的にものごとを考えるための根拠が何かの見分けがついているか」という質問に対しては、約80%の生徒が、「ついている」「だいたいついている」と答えた。

根拠の取り出し方については、資料から読み取れることと、読み取ったことを解釈することを分けるよう指導することが大切であると考えられる。例えば、数量の増減の推移を表すグラフを見せて、「このグラフから分かることを答えなさい」というと、以前の生徒は、大きくグラフが上下していることに自分なりの理由を付け加えて答えてしまうことが多かったが、現在はそのようなこともなくなってきた。また、単元テストの設問についても、根拠となっていることと解釈したことを区別することをねらった設問を出題するようにしている。

問：「衆議院が参議院より国民の意思を反映しやすい」とされる根拠になっていることを書きなさい。

答：衆議院議員は任期が参議院より短いことと、衆議院には解散制度があること。

根拠の取り出し方については、資料を読み取らせる際の計画的・継続的な指導が必要である。

4. 成果と今後の課題

今年度は「社会的思考を促す指導と評価～根拠を明確にした考察について～」という主題に基づいて研究を進めた。多面的・多角的に社会的事象を捉え、資料から得た情報や既習事項などによる根拠に基づいた論理的な考察を「社会的思考」と考え、こうした思考が生徒に身に付くように実践を行ってきた。その中で、4月の状態と比べて思考力に関してどのような力が身に付いたかのアンケートを行った。このアンケートに基づいて今度の成果と課題についてまとめることにする。

(1) 根拠を明確にした考察

生徒へのアンケートでは根拠について、「ア 何が根拠かの見分けがついていると思う。」「イ 何が根拠かの見分けはだいたいついていると思う。」「ウ 何が根拠か見分けがつけられていないと思う。」の3つの項目から一つを選択させた。結果はどの学年も、総じて「ア」が全体の約三分の一、「イ」が約三分の二を占め、「ウ」については数名という結果となった。生徒の大部分が根拠の重要性を理解し、意識しながら考察しようとする姿が見られるようになった。しかし、多数の生徒が「イ」を選択しており、生徒の中には自分が根拠として捉えた情報に自信が持てず、不安が見られるようである。今後の課題として、形成的評価の場を増やし、適時生徒にフィードバックすることで状況の改善が図られるのではないかと考えられる。考察内容の共有の場面や、生徒に対する指導・支援のあり方をこれまで以上に工夫する必要がある。

(2) 多面的・多角的な考察

右の表は多面的・多角的な考察に関するアンケート結果である。全体的には4月に比べて、多面的考察、多角的考察のいずれかにおいて思考力の向上が見られており、ある程度の成果は修めたと考えられる。しかし、学習指導要領では両方の捉え方ができることを目標としており、今後もさらなる改善が必要である。この表では「多角的に考察できる」と

4月に比べてどのように考察できるようになったと思うか

	多面的・多角的に考察することができる	多面的に考察することができる	多角的に考察することができる	どちらもできていない
1年生	20%	28%	43%	9%
2年生	58%	18%	22%	2%
3年生	34%	21%	40%	5%
全学年	37%	22%	35%	6%

1年生 155人 2年生 155人 (3年生 146人) 12月に実施
ただし、3年生には多面的・多角的な考察についての具体的なイメージを日常的に指導していない状態でアンケートを行った。

答えた生徒のほうが「多面的に考察できる」と答えた生徒よりも多く見られる。生徒にとって、立場は意識しやすく、社会的事象の様々な側面は区別しにくいのではないかと考えられる。社会的事象を複数の面を持つ立体として捉えることに困難が生じているようである。そこで、「事前に社会的事象が持つ複数の面を教えた上で、複数の立場から角度を変えて考察させる」ことから取り組むなど、発達段階に応じた段階的な考察場面の設定が必要となってくると考えられる。そのためには実践の積み重ねにより、考察に適した単元や題材を精選し、それを年間計画に位置付けていくような計画的な指導を行っていかなければならない。

また、今年度の実践から、多面的・多角的に考察するには動的に事象を捉える必要があるのではないかと考えた。例えば、「EUとは何だろう」は多面的な考察が中心となるが、「EUは国になるべきか」となると多面的・多角的に考察しやすくなる。このことから、学習課題をいかに動的に設定するかを意識していく必要がある。

昨年に続き、多面的・多角的な考察について取り組んだが、いまだに教師側の理解に不十分な面が見られる。社会科における基本的な考察の概念であるが、さらなる研究を重ねる必要がある。